公開講演会

愛は世界を動かす　―前近代宇宙論における神、知性、天球

坂本邦暢(*)

一　はじめに

ついに高く飛翔した我が表象力はここに尽きた。
しかし、すでに中心から等距離で回る輪のように
我が望みと我が意志を回していた、
太陽と星々をめぐらす愛が。[1]

ダンテ（Dante Alighieri, 1265–1321）『神曲』の結末部です。その最終行は amor、すなわち愛という言葉ではじまっています。この愛は私たちがふつうに考える愛とは違います。ここで歌われているのは、人間が人間にたいして、あるいは神にたいして抱く愛ではありません。この愛は「太陽と星々をめぐらす」のです。どうやらダンテは、私たちがもはや忘れてしまった種類の愛について語っているようです。

「太陽と星々をめぐらす愛」とはなんだったのでしょうか。なぜこのような愛が『神曲』にあらわれるのでしょうか。またダンテ以降、私たちはどうしてそのような愛を見失ってしまったのでしょうか。この問いに答えるためには、西洋の神学、哲学、そして科学の歴史をひもとかねばなりません。

二　神への愛

「太陽と星々をめぐらす愛」という観念は、ダンテの独

史苑（第七六巻第二号）

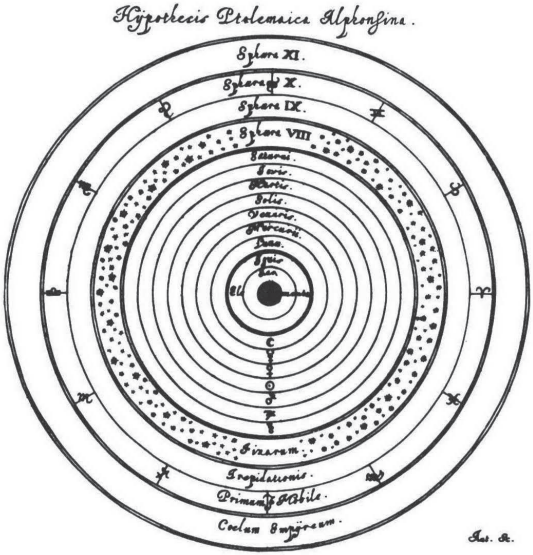

図１　伝統的な宇宙像

創ではありません。それはすくなくともアリストテレスにまでさかのぼります。アリストテレスは『形而上学』の第一二巻で、天の回転がどのように起きているかを説明しました。そこでの議論を検討するために、まずアリストテレスの考える宇宙像を確認しましょう。[2]

図一からわかるように、宇宙は巨大な球と考えられています。[3] 中心にあるのは地球です。そのまわりを星々が回転しています。より正確にいうなら、星を運ぶさまざまな天球が回転しています。天球による回転運動の組みあわせが、天の運行を生みだしているのです。

なぜ天球は回転するのでしょうか。アリストテレスによれば、その原因は一番外側の天球の回転にあります。一番外の回転が内に伝わっていくことですべての天球が動くのです。では一番外側の天球が回転するのはなぜなのでしょうか。この外にはもはや回転するものはありません。よってこの天球を回転させる原因は、それ自体としては動かずに天球を動かすようなものでなければなりません。この動かずに動かす者のことをアリストテレスは「不動の動者」と呼びました。これが神にほかなりません。

不動の動者は、私たちが物を動かすように、動者の方から作用をおよぼして天球を動かすのではありません。というのもアリストテレスによると、不動の動者は純粋な思考

であり、しかも自己自身について思考するものなので、外部に能動的に作用をおよぼすことはないからです。不動の動者がなにかを動かすとすれば、それは運動の作用因としてではなく、目的因として動かすことになります。この事態をアリストテレスは、不動の動者は「愛されるものが動かすように、〔天を〕動かすのである」と説明しました。[4] 神への愛こそが世界を回転させる原因なのです。

ですが神という第一の不動の動者だけでは、天にみられる複雑な運動は生みだせないとアリストテレスは考えました。そこで彼は第一の不動の動者とは別に、数多くの他の不動の動者を想定しました。これらの動者もまた、第一の不動の動者とおなじく、もっぱら思考活動を行います。

アリストテレスの理論は、後世の哲学者や神学者によって興味深いかたちで受容されました。まず第一の不動の動者は、アリストテレスにならって神と同一視されることが大半でした。これにたいしてその他の不動の動者は、知性(intelligentia)と呼ばれるようになります。それらがもっぱら思考活動を行うからでした。さらにこの天の知性は、アラビアの哲学者により天使と同一視されるようになります。この同一視はラテン中世世界にも引きつがれ、図像表現も獲得することになりました。

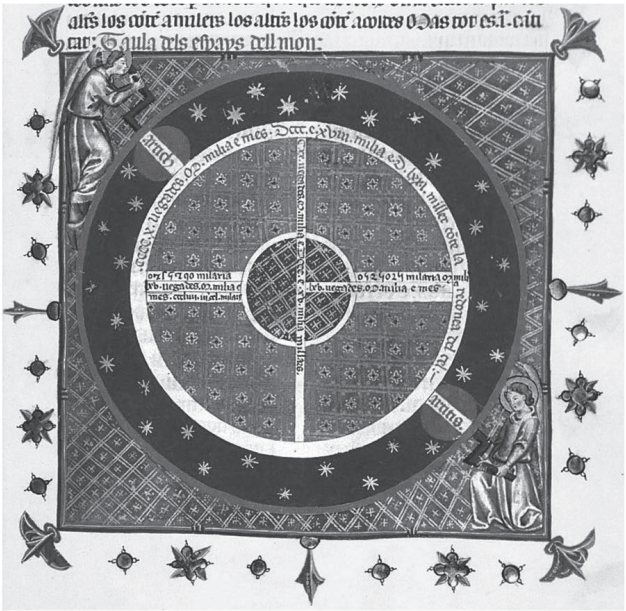

図２　天球を回転させる天使たち

図二は一四世紀に製作されたものです。そこでは両端に二人の天使がいて、彼らが天球を手でまわしています。[5]

以上からわかるとおり、アリストテレスの哲学とキリスト教の神学が融合した世界では、神への愛を究極の根拠として、神と天使たちが宇宙を動かしていました。このような世界観をダンテもまた継承しています。[6] たとえば「天国篇」には、「あなた〔神〕を希求するがゆえのあの回転」（1.76–77）という表現や、「他の全宇宙を自身によって引き連れていくこの天空が、最も愛に燃え、最も知を湛える火輪に該当するのです」（28.70–72）という詩行がみられます。この回転を引きおこすのが「星を動かす諸知性体」です（8.110）。知性の役割は、『饗宴』でよりはっきりと述べられています。「まったくそのあるものの思弁に、諸天の回転が追随する。これ世界の統治である。この世界はその原動者たちの思弁において智解せられたいわば一つの秩序づけられた法政である」。[7] 天使の思考が世界に秩序をもたらすというわけです。

三　神の愛

ダンテの世界では、神への愛が天球を回転させているのでした。しかし『神曲』にはもうひとつ別の宇宙論的な愛があらわれます。しかもそれは「神への愛」とは方向を逆にしたものです。「神の愛」です。たとえば神は「天空を支配する愛よ」呼びかけられます（「天国篇」1.74）。また「神の知性のなかにはこれ〔天球〕を回転させている愛と、これの降らせる力が燃え輝いています」ともいわれます（27.110–111）。神自身のうちにある愛が天球を回転させるのです。

神の愛により天が動くという考えは、アリストテレスにはありません。ではダンテの着想はどこからきているのでしょうか。それは古代末期の哲学者ボエティウス（Boethius, 480–524/25）であると考えられています。ボエティウスの『哲学の慰め』には次のような詩があります。

万物のかかる秩序をつなぐもの、それは陸と海を支配し、また天を支配するところの愛（amor）だ。愛が手綱を放せば、いま相互に睦んでいるものが絶えざる戦いを戦うであろう。いま統一的忠実さで、美しく動いている世界機構（machina）が、きそって崩壊するであろう。愛は維持する、国民間の聖なる盟約を。愛は結合する、純潔な相愛者の結婚を。愛は規定する、忠実な交友の法則を。おお、汝ら人類は幸いなるかな、けだし天を支配するその愛が、汝らの心をも支配するならば。[8]

「天を支配するその愛が、汝らの心をも支配する」なら幸せであるというのは、ダンテの「我が望みと我が意志を回す「太陽と星々をめぐらす愛」に対応しています。

四　「天国篇」における二つの愛

ダンテの世界では、神への愛と神の愛の双方が天を回転させています。正反対の方向性をもつふたつの愛が、おなじ現象の原因になるとはどういうことなのでしょう。この点を、ダンテが「天国篇」で展開する宇宙論にそくして考えてみましょう。

「天国篇」は宇宙の中心にある地球を脱して、天球からなる階層をひとつひとつのぼっていく過程を歌う叙事詩です。上昇をつづけたダンテは、第三〇歌で一番外の天球を離れます。そのとき決定的な転機をむかえます。というのもここにおいて通常の意味での宇宙は終わるからです。そこから先はもはや回転する世界ではありません。回転していないというより、そもそも物質からなる世界ではありません。そこはもはや、神の精神（mente）そのものです。

図３　『神曲』の至高天

図三で表現されているように、その場所を満たすのは光であり愛であり善であり喜びです。[9] そこにいるのは天使でありマリアです。つまりここそが天国なわけです。この場所をダンテは至高天、あるいはエンピレオと呼んでいます。[10]

天国には天使、マリアのほかにもうひとつ重要な存在が認められます。神です。三位一体の神です。

おお、永遠の光よ、ただご自身の中にのみあらせられ、
ご自身だけが自らのすべてを知るあなたは、自らに知られ、
自らを知りつつ愛を微笑まれる。（「天国篇」33.124–126）

「自らに知られ、自らを知りつつ」とは、第一の位格である父が、第二の位格である子とたがいに知りあうことを意味します。この結果神は「愛を微笑まれる」。こうして第三の位格である愛、すなわち聖霊が生まれます。このように生みだされた愛を通じて、父である神が子を「深く見つめる」（「天国篇」10.3）ことにより、世界のすべての事物の原型（l'essemplo;「天国篇」28.55）たる御言葉が考えられることになります。神の精神のうちにある世界の原型、これこそ『神曲』最終歌の核心部でダンテがまのあたりにするものです。

その深淵の中に私は見た、
宇宙全体に散り散りになって散逸している紙片が、
愛によってただ一冊の書物に綴じられ、収められているのを。

つまり実体と偶有とその両者の相互関係であり、
あたかも溶解したかのように合わさっていた。
その様子を語る我が言葉はそのかすかな反射でしかないが、
この結びつきを成り立たせる全宇宙に普遍的な形相（la forma universal）を
私は見たと信じている。（「天国篇」33.85–92）

世界の原型たる「全宇宙に普遍的な形相」は、いかに至高天を超えて、現実世界に実現されるのでしょうか。ここでダンテは光の比喩をもちいます。光源である父から発せられる光線が、「全宇宙に普遍的な形相」、すなわちイデアです。イデアは「生命をもたらす光」、あるいは「生命をもたらす力」とも表現されます（「天国篇」13.56, 30.108）。この生命原理としての光（そして力）が、聖霊である愛と一体化しながら（13.57）、世界を貫きます。すると世界の諸部分は、その高貴さにおうじて光を反射し、輝きます（1.1–3）。この輝きによってはじめて事物は生じるのです。

しかしこうして世界が生じたとしても、それだけでいま

あるような世界の秩序が実現するわけではありません。神の構想は、単に光が世界に一様に広がっても実現しません。光は適切なかたちで配られなくてはならないのです。この役割をになうのが天球の回転です。この回転は神の愛をそなえた光が直接的に引きおこすわけではありません。まず光の反射として、天使と天球が創造されます（「天国篇」7.130–132）。天使たちは善を求め、最高の善である神を理解しようとします。その理解が達成されたとき、天使たちのうちに愛が燃えあがります。この愛が回転運動を引きおこすのです[11]。回転によって生命をもたらす光（力）が下界に適切に分配され、そうしてはじめて世界の秩序が実現するわけです。

以上をまとめると、神が愛をもって生みだしたイデアが、天使の愛が引きおこす天球の回転をつうじて分配されることで、この世界は成立している、ということになります。

『神曲』にはふたつの宇宙論的な愛があらわれるということを見てきました。神の愛と、神への愛です。このふたつの両方を、ダンテはその神学的な宇宙論のうちに組みこみました。この構想によりダンテは、創造主と被造物の距離を適切なものに保とうとしたと考えられます。まずキリスト教の前提として、神は全事物の創造主でなければなりません。この意味で神の愛がすべての事物の源泉となるのはゆずれません。しかしこの愛が個々の現象の直接的な原因になってしまうと、創造主と被造世界の距離が縮まりすぎて、すべてが神になってしまいかねません。あるいは逆に創造主が被造物に吸収されてしまい、神の否定につながります。そこで必要となるのが自律性をそなえた神への愛です。これにより神とは区別された世界の領域が確保されます。しかし、もしこの自律的な領域が神との結びつきを失ってしまえば、神とは別の知性たちが世界を統治することになってしまいます。これは多神教ではないか。この帰結を回避するため、神への愛は神の愛の反射の産物としてとらえられます。こうして自律性をそなえた知性も、究極的には神にその根拠をもつことになるのです。要するに、ダンテにおいては、神の愛が神と世界を接続し、神への愛が神と世界を区別する役割をはたしているのです。

こう考えてみるならば、ダンテの構想はじつは危ういバランスのうえになりたっていたということがわかります。神の愛と神への愛のどちらであれ、いっぽうに力点をおきすぎるならただちに危険な結論が導かれるのですから。ではこれらの愛が、ダンテほどには慎重でない人物、あるいはダンテには想像もできなかったような世界理解の方法を手にしていた人間の手にわたったとき、なにが起こったのでしょうか。

五　コンシュのギヨーム

じつはダンテ以前に、神の愛が世界を動かすという考えを発展させていた人物がいました。一二世紀前半に活動したコンシュのギヨーム（Gulielmus de Conchis, ca. 1090–ca. 1154）です。その最初期の著作『ボエティウス「哲学の慰め」注解』のなかでギヨームは、大胆にも断言します。

世界霊魂は自然の力であり、この力によってあるものは動かされ、あるものは成長し、あるものは感覚し、あるものは認識する。ここでこの自然の力とはなんであるかが問われる。その自然の力とは、私には聖霊、すなわち神的で恵み深い調和であるように思われる。というのも神的な愛と調和によってすべてのものは動かされ、生き、成長し、感じ、認識するからである。これを自然の力と呼ぶのがふさわしいのは、すべてのものは神の愛によって生き、活動するからである。これを世界霊魂と呼ぶのがふさわしいのは、ただ神の愛と慈悲によってのみ世界に生きるすべてのものは生きるからである。[12]

ギヨームによると、世界霊魂とは自然の力であり、それは聖霊であり、神の愛です。さらにギヨームはプラトンの『ティマイオス』に依拠して、世界霊魂が天の運動を引きおこしていると論じます。[13] これはつまり神の愛が天を回転させているということです。神の愛はそれだけでなく、宇宙にあるすべての活動の原因であるとされています。愛は万物に浸透しており、これが場所によって違ったあらわれかたをすることによって、さまざまな現象が起こるのです。

ギヨームは後年の著作では、世界霊魂に触れることがすくなくなっていきます。これは、世界霊魂と聖霊の同一視が、創造主と被造物の混同であるとの批判を招いたからでした。しかしだからといってギヨームが神学的に穏健な方向に舵を切ったわけではありません。むしろ創造主と被造物の混同を徹底して避けることから、すべての自然現象が被造世界内で完結するかたちで説明されるようになります。たとえば『宇宙の哲学』という著作には、世界霊魂の概念がいぜんとして多少あらわれるものの、天の運動は火の回転運動として説明されます。また最後の著作『ドラグマティコン』では、世界霊魂に関する節は削除され、すべての現象が自然の力の作用として説明されるようになったのでした。[14]

ギヨームのうちに私たちは、世界の原理として導入された神の愛が、やがて力として自然のうちにのみこまれるのをみます。この自然主義はしかし中世で広い支持を集めることはありませんでした。なにかが足りなかったのです。そのピースが埋められるのは、数百年あとのことでした。

六　カルダーノとスカリゲル

神の愛と神への愛の亀裂は、一六世紀半ばに表面化します。この亀裂をよくしめすのが、当時二人の医学者のあいだで行われた論争でした。その二人とは、ジローラモ・カルダーノ（Girolamo Cardano, 1501–1576/77）とユリウス・カエサル・スカリゲル（Julius Caesar Scaliger, 1484–1558）です。カルダーノは神の愛に重点をおき、スカリゲルは神への愛を強調しました[15]。

カルダーノは、ギョームと類似の説を、ギョームとは異なる土台のうえに発展させたといえます。ギョームとおなじく、カルダーノも世界霊魂の学説を採用します。神に由来するひとつの力が世界に浸透しています。この力は結合する対象によって違ったあらわれ方をします。天上であらわれるときは知性、地上で人間の身体と結合するときには人間霊魂、動植物と結合するとその霊魂になるというわけです。

この力をカルダーノは三位一体の教義と結びつけます。彼によれば、神には三重の性質が備わっています。力、精神、そして愛です。この三重の力はいたるところに認められます。たとえば人間は力によって身体を動かし、精神によって現象を理解し、愛によって自らが望むものを欲するのです。カルダーノはいいます。「したがってあきらかなことは、この三重にして、不可分な力は三位一体のしるしとして、最小の事物にいたるまで流れこんでいるということである[16]」。この力の一角を愛がしめるのですから、これは神の愛が世界に浸透しているとみなす世界観といえます。

ここまでの議論はコンシュのギョームのものとさほど変わりないですし、ダンテの考えとも近いといえるでしょう。しかしカルダーノは新たな要素を加えます。万物に浸透する力を熱と同一視するのです。この着想は注釈者アヴェロエス（ca. 1126–98）からとられていました。こうして熱こそが万物の原理となり、ギョームの考えた自然の力、およびダンテが構想した生命を与える光にとってかわることになります。神が世界に熱をあたえ、それがすべての現象を引きおこしているというのです。これは神の愛を力とみなすことから自然主義へいたるという点ではギョームとおなじ道をたどっています。しかしカルダーノの自然主義ははるかに徹底したものになっています[17]。

熱による一元論的な自然主義に反発したのが、スカリゲルでした。カルダーノは天体の運動の原因をあまり論じないのですが、スカリゲルはこの問題を積極的にとりあげます。スカリゲルによれば、単一の原因が宇宙の動きを制御しているとは考えられません。それでは天の運動の多様性

を説明できないのです。むしろ天を動かす多数の者を想定しなければなりません。多くの知性（天使）が多くの天球を回転させるという古典的なモデルへの回帰です。では天球はどのように回転するのでしょうか。スカリゲルは答えます。

私たちはこれまでにも必要にせまられて〔アリストテレスの〕『形而上学』第一二巻の内容をくりかえし述べてきた。それは次のようなものだ。第一の天球を動かす知性は、この運動をただ自らを理解することによってのみ達成する。〔中略〕第一の知性は自らがそのため〔第一の天球を動かすため〕に創造されたということを理解するのだ。それゆえ、この理解は神への愛と、神との一致を生みだすのみならず、わざをも生みだすのである。[18]

よって巨大な天が円運動を行うことになる。

知性は自らについて考えることで、自分が神によって創造されたと理解し、そこから神への愛をかきたてられます。また同時に自分が神によって天球を動かすために創造されたということも理解します。それにより知性がもつ愛は、天球を動かすという欲求になり、この欲求によって天が動くのです。特徴的なことに、スカリゲルはこの一連の過程に力はけっして関与しないと強く主張します。知性は力によって天球を動かすのではなく、ただ欲求から天球を動かすというのです。そうすることで、力による一元論というカルダーノの構想を徹底的に排除しているのです。

力の追放は天の領域にとどまりませんでした。ここで詳しく論じることはできませんが、スカリゲルは力が天ではたらくことを否定するだけでなく、天から地上へと力が降りそそぐという考えも強く警戒しました。そのように考えてしまえば、結局は天から来る単一の原理にすべてがしたがうことになってしまい、結果的にカルダーノのような一元論に着地してしまうからです。こうしてスカリゲルはダンテとも決別しました。『神曲』で論じられていた、神の愛が天の運動をかいして地上へと分配されるという理論も拒否されるのです。つまるところスカリゲルは、単一の力が分かれて多様性が生まれるというモデルをおよそ拒否しました。その力が物質とみなされたとき、極端な自然主義があらわれるからです。スカリゲルはむしろ最初から多様な事物が、神への愛のもとで協力しあうことによって、世界に秩序が生まれるという考えを支持します。[19]

こうして神の愛は切りすてられ、神への愛が世界を動かすようになりました。神の愛に力点をおく思考は、コンシュのギョームのときとおなじく、主流にはなりえませんでした。事実カルダーノの哲学が異端の嫌疑をかけられたのとは対照的に、スカリゲルの著作は大学の教科書としてひろ

く読まれるようになります。

しかし愛をめぐる対立はこれで終わりをむかえるわけではありません。最後の転機は、スカリゲルの著作を一八歳のときにチュービンゲン大学で手にとった人物によってもたらされます。

七　神の愛と新しい天文学

ヨハネス・ケプラー（Johannes Kepler, 1571–1630）は天文学の領域で画期的な成果をあげた人物として知られています。ですがだからといってケプラーを現代の天文学者や宇宙物理学者のようにみなしてよいわけではありません。忘れられがちではありますが、ケプラーは元来大学で神学を修めようとしていました。天文学に専念するようになってからも、あくまでも神学に基礎づけられた天の理論を構築しようとしたのです。そのためケプラーの構想には、神の愛という観念があらわれます。また神の精神のうちにあって宇宙の原型となるような、根源的イデアという考えも認められます。しかしダンテにあったこれらの観念は、ケプラーのなかでは根本的な変容をこうむっていました。その変容をもたらしたのが、彼の新しい天文学です。

よく知られているように、ケプラーの考える宇宙は伝統からおおきく離れていました。まず宇宙からは天球がなくなっています。星は天球が運ぶのではなく、ケプラーの言葉を借りるなら「鳥たちが大気中を飛んでいくように」宇宙空間を飛ぶのです。[20] この飛行の原因として、知性を想定するのは不適当だとケプラーは考えました。というのも、天球なしに星々を適切に回転させるためには、知性に莫大な計算能力が必要とされるからです。

しかしこれ以上に根本的なところでケプラーの宇宙論は、伝統から決別していました。プトレマイオスの否定であり、天動説の否定であり、コペルニクス（Nicolaus Copernicus, 1473–1543）と地動説の肯定です。それだけでなく、天体は円軌道をえがくという前提すらケプラーは放棄していました。この前提こそケプラーによれば自分から「時間を奪った盗人」です。それは「あらゆる哲学者たちの権威で武装しているうえに、とくに形而上学にもふさわしいので、とりわけ有害だった」といわれます。[21] この盗人を追放し、理論を観測結果と一致させたとき、惑星は楕円軌道をえがくという結論がえられました。

ではこの楕円軌道の原因はなんなのでしょう。もはや知性は想定できません。すると、すべての天体が太陽のまわりを回転しているのだから、太陽が天体を動かしていると考えられます。では太陽にはどんな原因があるのか。それ

は太陽にある霊魂からの直接の作用ではないとケプラーは考えます。もし霊的な作用により回転しているならば、軌道は円になるはずです。よって太陽にある原因は物理的な力だとケプラーは結論づけます。しかもその力は磁気、あるいは磁気に類似したなんらかの力だというのです。さらに重要なことに、この磁気的な力による回転軌道は、幾何学的に表現することができます。その表現がいわゆるケプラーの法則にほかなりません。[22]

じつはケプラーにとってこの幾何学的な表現の根拠こそが、神の愛と、神のうちのイデアでした。神のうちにある世界の原型（archetypus）が、まさに幾何学なのです。これを手本として物理的世界は創造されています。よって世界は幾何学的な構造をしています。しかもこのような構造はただ存在するだけではなく、人間によって理解しうるものとしてあります。なぜか。それは神のうちの幾何学が、神の似姿としての人間の知性のうちにも刻まれているからです。古代のプラトン主義者プロクロスからケプラーは引用します。すなわち「精神はどんな説明も書きこまれていないタブラ・ラサではない。いつも書きこみのある書板である」。[23] 幾何学を書きこまれているからこそ、人間精神は物理的世界に実現された幾何学を理解できるのです。世界理解の根拠となる幾何学はどうして人間の精神に与えられたのでしょうか。それは創造主である神が人間を愛しているからです。じつに人間精神は「創造主たる神の最愛の娘」にほかなりません。[24] 神の愛ゆえに、人は世界を理解できるのです。

以上のような新しい天文学の構想のうえにたって、ケプラーは伝統的な不動の動者の理論を論評します。

しかもかの哲学者〔アリストテレス〕は運動が永遠に続くとしたので、主動者もまた永遠なものとした。すると主動者は無限の時間にわたって運動を与えることになるが、アリストテレスは質料をもつどんなものも無限ではありえないことがわかっていたので、主動者も質料をもたず独立した、それゆえに不動の始原だとした。さらに運動の永続性から宇宙の永続性を立てたが、本質のこうした持続こそ、悪しき消滅と相反する宇宙全体の善さであり完全さなので、彼はその始原に、至高の完全さとその自覚、正しい自覚により善を正しく行う意志を配した。こうして独立した知性、ようするに神々を、天体の永続的運動の管理者として導入した。〔中略〕宇宙の始まりについて何も知らなかったか、もしくは始まりのあることを信じなかったアリストテレスは、その役割を運動の起動者自身に帰さざるをえなかった。そしてアリストテレスの信奉者たちや、信仰

告白によってキリスト教徒となっているスカリゲルまでも、公然と、天球のこの運動が自発的なもので、その意志の始原は天球の自覚と欲求だと論じている。[25]

アリストテレスは異教徒であったため、世界の創造を知りませんでした。よって宇宙の秩序だった運行を説明するためには、知性という独立した神々を導入するしかありませんでした。しかし創造を知るスカリゲルには、知性を導入して多神教に傾く必要はなかったはずです。むしろ最初の知性である創造神に直接秩序の源泉をもとめるべきではなかったか。

こうして神への愛をになう知性は世界から排除されました。それは天文学的に不合理な天球の存在を前提にしており、しかも神学的には多神教の名残りだとされたのです。残ったのは神の愛、そして神のうちにある原型、ダンテの表現を使うなら「全宇宙の普遍的形相」でした。だが愛も原型もおおきな変容をこうむっています。もはや原型は生命を与える力の源泉ではなく、幾何学となりました。神の愛は力として世界をつつむのではなく、原型が人間精神のうちにも植えつけられているという事態を保証する役割をはたします。いまや愛と原型は、世界は数学的に構成されており、それを人間はあますところなく理解できるというという、一七世紀哲学、そして自然科学を支える確信を基礎づけるのです。ダンテにおいては愛によって綴じられていた宇宙という書物は、ガリレオ・ガリレイ（Galileo Galilei, 1564–1642）によって数学の言語で書かれた書物として再定義されるでしょう。[26]

この強力な世界観はしかし、創造主と被造物の関係をめぐって深刻な問題を引きおこしました。宇宙が物理的な力によって動かされるなら、そのような宇宙は、いうなればひとつの機械、とりわけ巨大な時計でないでしょうか。この機械仕掛けの宇宙に、神ははたして必要なのでしょうか。この事態をブレーズ・パスカル（Blaise Pascal, 1623–1662）以上に適切に表現した人物を私は知りません。

私はデカルトを許せない。彼はその全哲学のなかで、できることなら神なしですませたいものだと、きっと思っただろう。しかし、彼は、世界を動きださせるために、神にひとつ爪弾きをさせないわけにはいかなかった。それからさきは、もう神に用がないのだ。[27]

神の愛を自然のうちに埋めこむというギョームの試みは、ついに完成されたかのようです。パスカルとおなじ種類の懸念は、アイザック・ニュートン（Isaac Newton, 1642–1727）によっても鋭く意識されていました。

時計が時計師の助けなしにも動きつづけるのと同様に、ひとつの大きな機械としての世界が神の介在なし

にも動きつづける、という考え方は、唯物論と宿命論のものであり、（神を「超世界知性体 Supra-Mundane Intelligence」にするという口実のもとに）神の摂理と現実支配とをこの世界から排除せんとするものです。[28]

ここからニュートンは、神による介入をつねに必要とする世界という考えを推しすすめていきます。しかしその努力もむなしく、その後の科学はニュートンの懸念を具現化する方向に進んでいきました。パスカルのみならず、ケプラー、デカルト、ニュートンの意図にもまったく反するかたちで、神への愛も神の愛もなくなった世界で、宇宙は力によって回転しつづけることになったのです。こうして神を愛する知性を、神の愛がのみこみ、そして神もまた消え去ったとき、愛だけが重力として残ったのでした。[29]

八　失われた愛を求めて

神、知性、天球が存在する世界のなかでダンテは『神曲』を書きました。その世界は、それから三〇〇年以上あとに書かれた叙事詩でもなお生きていました。ミルトン（John Milton, 1608–1674）は歌います。

その頃、球形をなしているこの宇宙の
（その最も外側に原動天［first convex］があり、これが「混沌」と
年老いた暗黒の侵入を防ぐ一方、内側にある
いくつかの輝く球層を守る障壁の役目を果たしていたが）
この宇宙の薄暗い球面の上に、サタンが舞い降り、
歩いていた。[30]

ですがミルトンは同時に、自分がもはやダンテとは違う世界に住んでいることも知っていました。新しい天文学を知らずにいることはできなかったのです。たとえば『失楽園』では、太陽が宇宙の中心にあるという説が紹介されます。そればかりか、太陽が磁力をもつ光線によって星を回転させるというケプラーの説まで登場します（3.583–587）。だがこの新しい宇宙と、神、サタン、そして人間がつくりだす失楽園の物語は両立するのでしょうか。

だが、もし地球がししとして自ら
東方に旅をして昼を運んできて、太陽の光線に背を向けた
部分では夜と出逢い、他の部分ではその光をうけて終始
輝きつづける、ということであれば、昼と夜の車輪（原動天）などと
いうものは、信ずる必要はなくなる。[31]

もし原動天がないなら、サタンはどこに舞い降りればいいのでしょう。降りる場所がなく、人を誘惑することができ

ず、けっきょくのところ失楽園は起きないということでしょうか。知性も、天球も、愛もない宇宙で、楽園の場所を定めることがいかに困難であったかを、ミルトンは教えてくれます

ダンテの宇宙は過去のものになりつつありました。そうして変わってしまった世界に私たちは生きています。しかしそんな私たちにも、なにかの拍子に、いまでは失われてしまった中世における愛の諸相が想起されることがあるかもしれません。それはたとえばジェフリー・チョーサー（Geoffrey Chaucer, ca. 1343–1400）の作品を読むときです。『トロイルスとクリセイデ』では、恋におちたトロイルスが愛をうたいます。

大地と海を治めたもう愛（Love）よ、
高い天空にて指揮なさる愛よ〔中略〕

世界は確固たる信念を持ち
調和を保ちつつ季節を変える、
調和したがらぬ地水火風の四元素は
永遠の絆を保つ、
日輪フォイボスは薔薇色の日々をもたらし、
月は夜を統べる、
これすべて愛が成したもう、その力を称えよう！〔中略〕
自然の創造者たる神よ、願わくは
愛がその鎖もてその力により
喜んであらゆる人の心を取り囲み、しっかり縛りたまえ、
その束縛から逃れる出口を誰にも知られぬように。
〔中略〕そして心がまことである人々を守りたまえ！[32]

史苑（第七六巻第二号）

「守りたまえ」というからには、もちろん守られません。トロイルスはクリセイデに裏切られて叫びます。「君の愛はどこにあるのか[33]」。この嘆きがいっそう悲痛にひびくのは、太陽をすべ、月をすべ、昼と夜をすべ、季節をすべるほどの力をもつはず愛が、ひとりの人間の心すらつなぎとめることができなかったからです。宇宙の愛と人間の愛のあいだにはしる亀裂こそが、チョーサーの悲劇を悲劇たらしめているのです。

たしかに私たちは世界を動かす愛を見失ってしまいました。それを無理にとりもどそうとすれば、おそらくミルトンよりもなお困難な地点においこまれてしまうでしょう。それでもなお、私たちがトロイルスの嘆き理解しようとするなら、私たちはせめてそのような愛がかつてあったということを思いださねばなりません。そのとき、ほんのすこしのあいだだけ、私たちの表象力は高く飛翔し、その望みと意志はまわるのかもしれません。太陽と星々をめぐらす愛によって。[34]

註

（＊）本稿は、二〇一五年一一月二二日に上智大学で開催された講演会「中世における愛の諸相」（中世思想研究所主催／女性神秘家研究会共催）の講演原稿である。講演会開催に尽力いただいた阿部善彦博士、梅田考太博士に御礼申し上げる。発表のさいには、コメンテーターである津崎良典博士から貴重な示唆をいただいた。記して謝意をあらわしたい。最後に講演原稿の『史苑』への掲載を提案いただいた小澤実氏に感謝する。

（1）ダンテ『神曲』「天国篇」33.142–145。『神曲』からの引用はすべて原基晶訳（講談社学術文庫、二〇一四年）に依拠する。以下の「天国篇」理解も原の解説におおくを負っている。この画期的訳業へのささやかな注として本稿が読まれればさいわいである。「天国篇」末尾の解説としては以下も見よ。Peter Dronke, “L’amor che move il sole e l’altre stelle,” *Studi medievali*, 3ª serie, 6 (1965): 389–422, repr. Dronke, *The Medieval Poet and His World* (Rome: Storia e Letteratura, 1984), 439–475; 長谷川悠里「機械時計と神的リズム―『神曲』天国篇第二四歌における AEQUALITAS」『イタリア学会誌』第六一巻、二〇一一年、一―二二頁。

（2）アリストテレスの議論の解説として、G・E・R・ロイド［川田殖訳］『アリストテレス―その思想の成長と構造』（一九七三年、みすず書房）一二〇―一三六頁を見よ。

（3）図一は、Johannes Hevelius, *Selenographia: sive, lunae descriptio* (Danzig: Andreas Hünefeld, 1647), 161 からとった。この宇宙像はアリストテレスの想定と異なる点をもつが、ここでの議論に影響を与えるものではない。

（4）アリストテレス［出隆訳］『形而上学』第一二巻第七章 1072b18–21「アリストテレス全集　一七」（岩波書店、一九七二年）四一八頁。

（5）図二は、British Library, ms Yates Thompson 31, fol. 45 からとった。天体の運動の原因に関する中世の議論については、エドワード・グラント［小林剛訳］『中世における科学の基礎づけ』（知泉書館、二〇〇七年）一七四―一七七頁を見よ。

（6）「天国篇」26.37–39「このような真理は、あらゆる永遠なる実体の第一の愛を私に明らかにされた方が、私の知能へ平易に示しています」。

（7）ダンテ［中山昌樹訳］『饗宴』第二篇「ダンテ全集　五」（新生堂、一九二五年）一一三頁。

（8）ボエティウス［畠中尚志訳］『哲学の慰め』第二部八（岩波文庫、一九三八年）八三―八五頁。ボエティウスは『神曲』「天国篇」10.124–126 に登場する。中世におけるボエティウスの伝承については、クラウス・リーゼンフーバー［村井則夫訳］「ボエティウスの伝統―プラトン主義とアリストテレス論理学の中世への継承」『中世哲学の源流』（創文社、一九九五年）七七―一二七頁を見よ。

（9）「天国篇」30.38–42「私達は最も大きな星体から外に抜け出して純粋な光でできた空に入ったのです。それは叡智の光であり、愛に満ちています、それは真実の善の愛であり、歓びに満ちています、その歓びはあらゆる甘美を超越しています」。図三は、ポール・ギュスターヴ・ドレ（Paul Gustave Doré, 1832–1888）が「天国篇」第三一歌に添

えた挿絵。*Il Purgatorio e il Paradiso* (Paris: Hachette, 1868) に初出。

(10) ダンテの至高天理解については、Christian Moevs, *The Metaphysics of Dante's Comedy* (Oxford: Oxford University Press, 2005), 15–35 を見よ。至高天と天国の同一視については、平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』花書院、二〇一三年、四二—五五頁；平岡「イエズス会とキリシタンにおける天国（パライソ）の場所」ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のミクロコスモス—中世ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』（中央公論新社、二〇一四年）三六二—三八六頁を見よ。

(11) 「天国篇」26.28–30「なぜなら善とは、善であるがゆえ、理解されると即座に愛を燃え上がらせるからです」。天使の愛がなぜ回転運動を引きおこすのかは完全にははっきりしない。ひとつの説明として、Moev, *Metaphysics of Dante's Comedy* (note 10), 29–30 を見よ。

(12) William of Conches, *Guillelmi de Conchis Glosae super Boetium*, ed. L. Nauta (Turnhout: Brepols, 1999), 169–170. ギョームについては、トゥッリオ・グレゴリィ［飯尾都人・近藤映子訳］「アリストテレス自然学導入以前の中世哲学における自然観—一二世紀（正）」『イタリア学会誌』第一七巻、一九六九年、一〇八—一二九頁の一一六—一一八頁；大谷啓治「コンシュのギョームの『ティマイオス』注釈」上智大学中世思想研究所編『キリスト教的プラトン主義』（創文社、一九八五年）一三三—一五四頁；大谷「コンシュのギョームの『宇宙の哲学』」上智大学中世思想研究所編『中世の自然観』（創文社、一九九一年）五七—七五頁；大谷「コンシュのギョームにおける学問の擁護」上智大学中世思想研究所編『中世の学問観』（創文社、一九九五年）九五—一一一頁を見よ。

(13) William of Conches, *Glosae super Boetium*, 172.

(14) 神崎繁「解説」コンシュのギョーム［神崎、金澤修、寺本稔訳］『宇宙の哲学』上智大学中世思想研究所、岩熊幸男編訳・監修『中世思想原典集成　八　シャルトル学派』（平凡社、二〇〇二年）二七〇—二八四頁の二七五—二七六頁を見よ。

(15) 本節は、Kuni Sakamoto, *Julius Caesar Scaliger, Renaissance Reformer of Aristotelianism: A Study of Exotericae Exercitationes* (Leiden: Brill, forthcoming in 2016) に依拠する。カルダーノに関しては、榎本恵美子『天才カルダーノの肖像—ルネサンスの自叙伝、占星術、夢解釈』（勁草書房、二〇一三年）も見よ。

(16) Girolamo Cardano, *De arcanis*, in *Opera omnia* (Lyon: Jean-Antoine Huguetan, 1663; repr. Stuttgart: Frommann, 1966), vol. 10, fol. 6a. ダンテ『神曲』「地獄篇」3.5–6 では、地獄の門をつくったのは「神の力、至高の知、第一の愛」と歌われている。

(17) カルダーノの熱の理論については、ヒロ・ヒライ「ルネサンスの星辰医学—占星術の変容から普遍医薬の探究へ」『学習院女子大学紀要』第一六号、二〇一四年、二三—四一頁の三四—三七頁を見よ。

(18) Julius Caesar Scaliger, *Exotericae Exercitationes* (Paris: Michel Vascosan, 1557), 359.8, 464r.

(19) 同種の思考は発生現象についてのスカリゲルの議論にも

認められる。坂本邦暢「アリストテレスを救え―一六世紀のスコラ学とスカリゲルの改革」『知のミクロコスモス』（前掲注一〇）二五二―二七九頁を見よ。

(20) ケプラー［岸本良彦訳］『新天文学』（工作舎、二〇一三年）第二章、一〇九頁。

(21) ケプラー［岸本訳］『新天文学』第四〇章、三八八頁。

(22) ケプラーの天文学については、山本義隆『世界の見方の転換　三　世界の一元化と天文学の改革』（みすず書房、二〇一四年）九五九―一一一二頁（および「付記C」）を見よ。

(23) ケプラー［岸本良彦訳］『宇宙の調和』（工作舎、二〇〇九年）第四巻第一章、三〇六頁。

(24) ケプラー［岸本訳］『宇宙の調和』第五巻第七章、四五三頁。

(25) ケプラー［岸本訳］『宇宙の調和』第二章、一〇七―一〇八頁。

(26) ガリレオ・ガリレイ［山田慶児、谷泰訳］『偽金鑑識官』豊田利幸責任編集『ガリレオ』「世界の名著　二六」（中央公論社、一九七九年）三〇八頁。

(27) パルカル［前田陽一、由木康訳］『パンセ』（中央公論新社、二〇〇一年）上巻、六〇―六一頁。

(28) サミュエル・クラーク［米山優、佐々木能章訳］「クラークの第一返書」『ライプニッツとクラークとの往復書簡』下村寅太郎他監修『ライプニッツ著作集　九　後期哲学』（工作舎、一九八九年）二六八頁。クラークはニュートンの見解を代弁している。

(29) 重力概念の歴史として、山本義隆『磁力と重力の発見』全三巻（みすず書房、二〇〇三年）；奥村大介「重力の観念史」『哲学』三田哲學會、第一二九巻、二〇一二年、四三―七二頁を見よ。

(30) ミルトン［平井正穂訳］『失楽園』3.418–423（岩波文庫、一九八一年）上巻、一四〇頁。

(31) ミルトン［平井訳］『失楽園』8.136–140、下巻、五二頁。ダンテとミルトンを比較する着想は、三浦逸雄「ダンテと天の説」『イタリア学会誌』第二一巻、一九七三年、一一―二四頁の二四頁からえた。ミルトンと天文学については、渡辺正雄『『失楽園』と新天文学』『文化史における近代科学』未来社、一九六三年、二三―四三頁を見よ。

(32) チョーサー［笹本長敬訳］『トロイルスとクリセイデ』4.1744–1771（英宝社、二〇一二年）一一二頁。ダンテとチョーサーの愛についての詩行を関連づけた研究として、Dronke, "L'amor che move il sole e l'altre stelle" (note 1) を見よ。

(33) チョーサー［笹本訳］『トロイルスとクリセイデ』5.1676、一九二頁。

(34) 講演会において津崎良典博士は、宇宙論的な愛とハルモニア（調和）の観念の密接な結びつきを指摘した。残念ながら本稿はこの指摘にこたえられていない。以下のような文献を手がかりに今後考察されるべき問題である。ジョスリン・ゴドウィン［斉藤栄一訳］『星界の音楽―神話からアヴァンギャルドまで　音楽の霊的次元』（工作舎、一九九〇年）；名須川学「鳴り響く永遠真理―アウグスティヌス的数理思想の一七世紀的展開」『パトリスティカ―教父研究』第一三号、二〇〇九年、八五―一〇二頁；長谷川悠里「ダンテ『神曲』天国篇―天球運動が織り成す調和」『イタリア学会誌』第六〇巻、二〇一〇年、一一一―一三三頁。

（本学兼任講師）